

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

# ボランティア情報

2018  
no.491  
月号



この言葉をきっかけに、荒木さんは地域の会合などあらゆる場  
に自ら参加し、地域とのつながりを築いてきた。これがベビースマ  
イル石巻の活動を広げ、またネットワークによる地域の子育て支  
援力を高めてきた。荒木さんは、「自分たちの理想の活動を求め  
つつ、多くの方々とのつながりを通じて、主張を押し付けず、互い  
に尊重しあう重要性を学んできました」と振り返る。現在は市の  
子育て支援事業を受託し、自主事業も展開して幅広い子育て支  
援を進めている。

市内では災害復興公営住宅への入居が進み、コミュニティも変  
化している。荒木さんは、「妊産期・子育て世代のニーズが見えづ  
らくなり、ともすれば当事者が孤立してしまいかねない面があり  
ます。活動を通じて、子育てや地域を『見える化』し、当事者の孤立  
を防ぎたい」と、引き続き支援の必要性を語ってくれた。

ベビースマイル石巻は、東日本大震災直後の2011年5月  
から、妊産婦や未就園児親子の居場所づくり活動を始めた。  
代表の荒木裕美さんは、2007年に石巻市に転居した。慣れ  
ない石巻で育児に臨むなかで、同じ育児中の母親どうしによるボ  
ランティア活動への参加が、自らの心の励みとなった。しかし、東  
日本大震災ではともに活動したメンバーを失い、また転居を余儀  
なくされた人もいた。荒木さんは、「親子の笑顔が一つでも増え  
る場所を作りたい」と、思いを同じくする仲間とベビースマイル  
石巻を立ち上げ、震災後の親子のケアを行ってきた。

震災から1年が過ぎた頃、一緒に支援活動を行っていた助産師  
から、「被災地の子育て支援団体は、自らの活動は頑張っているが  
団体どうしがつながっていない。これからの石巻の子育てをどう  
していくのか、展望が見えていない」とのアドバイスがあった。

つながりの  
絆 宝え



宮城県石巻市 特定非営利活動法人  
ベビースマイル石巻  
代表  
あらき ひろみ  
荒木 裕美さん

妊産婦・子育て親子の孤立を防ぎ、  
一人ひとりの出会いを紡ぐ活動を創る

## Contents

特集

## 子ども食堂の「今」～地域で支えあう取り組みへの深化～

06 ・企業のチカラ  
カナツ技建工業株式会社

07 ・出会いから始まる福祉共育  
・地域に活気・活動に元気、  
ファンディングのすすめ

08 ・保険のひろば  
・「ボランティア全国フォーラム  
軽井沢2018」のご案内

# 特集 子ども食堂の「今」 ～地域で支えあう取り組みへの深化～

子ども食堂が全国約2,300か所で開催されているとの調査結果が発表される(2018年4月、子ども食堂安心・安全向上委員会)など、各地で子ども食堂の多彩な活動が広がっている。子ども食堂を通じて子どもが抱える課題と向き合い、学習や生活支援につなげていく取り組みが各地で行われている。

また、子ども食堂を継続的に実施するために、地域のさまざまな機関・団体がつながり、ネットワークを築くことの必要性も認識されつつある。今回の特集では、子ども食堂を地域で支えあう実践を紹介する。(※本文中では「子ども食堂」と表記していますが、個別名称は各団体の表記にあわせています)

## 事例1 新潟市社会福祉協議会「新潟市こども食堂ネットワーク」



左から、横尾さん、小池さん、細野さん

新潟市社協は、昨年6月に設立された「新潟市こども食堂ネットワーク」(以下「ネットワーク」)の事務局として、市内21か所、準備中8か所の子ども食堂の連携を支援しています。ネットワークのメンバーの方々に、経緯や今後の取り組みへの思いを伺いました。

新潟市社会福祉協議会地域福祉課  
こども家庭事業推進係  
主幹係長

よこ お み よ こ  
横尾 三代子 さん

新潟県立大学人間生活学部  
子ども学科  
教授

こ い け ゆ か  
小池 由佳 さん

子ども食堂「こどもの茶の間」  
(新潟市東区)  
主催

ほ そ の ひ ろ や す  
細野 弘康 さん

### 社協職員の関わりから始まった市内の子ども食堂

新潟市内最初の子ども食堂は、2015年12月から運営を始めた「にいがたふじみこども食堂」です。設立の中心となったのは、地域の子育ての悩みを分かち合い、親子の支援に取り組んできた3名の女性。社協職員である横尾三代子さんもその一人です。横尾さんは、当時仕事を離れたプライベートの取り組みとして子ども食堂を開設しました。

横尾さんは子ども食堂を開設する際に、市民の一人として新潟市東区社協を訪ね、地域のキーパーソンである自治会長を紹介してもらいました。自治会長からも「応援するよ」との言葉を得て、地域の集会所を会場に活動を始めました。立ち上げ1年目は、共同募金の助成金も活用しました。横尾さんは「後にくる団体のために、失敗しないようプレッシャーを抱えての取り組みでした」と、当時を振り返ります。

### 学生の協力が子ども食堂運営の大きな力に

「にいがたふじみこども食堂」には、栄養士や保育士をめざす新潟県立大学の学生がボランティアとして参加しました。横尾さんと協力して、子ども食堂の立ち上げ支援や学生のボランティア活動コーディネートが続けてきた新潟県立大学教授の小池由佳さんは、「子ども食堂での活動の充実感が他の学生に伝わり、学生の参加が広がりました」と、学生のつながる力の強さを語ります。

栄養士をめざす学生にとって、これまで食を通じたボランティア活動の場は少ない状況でしたが、子ども食堂と関わることで、栄養士をめざす自らの学びの接点を得ることができます。小池さんは「食事の味付けについても、学生は座学では得られない『いい塩梅』を、地域のみなさんから教えてもらっています」と、活動の意義を語ります。

また、保育士をめざす学生にとっても、子ども食堂を通じた小中学生との関わりが、乳幼児期からの成長過程を学ぶ場にもなっています。

「にいがたふじみこども食堂」に携わった新潟県立大学の大学生は、その後、学生自身の力で地域に子ども食堂を作りたいとの思いを強くしました。2016年、新潟県立大学、新潟青陵大学の大学生と大学教員のサポートにより、新潟市中央区に「そらいろ子ども食堂」を立ち上げ、月2回の開催を現在まで継続しています。

### 「新潟市こども食堂ネットワーク」への発展

市内に広がる子ども食堂の実践により、2016年、市社協では総合計画第2次実施計画に子ども食堂の推進を明記し、2017年には市社協が事務局を担う「新潟市こども食堂ネットワーク」を立ち上げました。横尾さんは、「各団体とも、情報交換の必要性を感じていました」と振り返ります。

ネットワークは年3回のペースで開催し、これまでに寄付品の受付や取り扱い方、子どもにとっての居場所の重要性などの情報交換を進めています。グループワークの進行役は、各区社協の

全社協 中央福祉学院「社会福祉主事資格認定通信課程」受講者募集(締切:2018年7月2日)

民間社会福祉事業の現場に現在勤務している職員を対象に、社会福祉主事任用資格を通信教育により取得することを目的として開講。社会福祉に関する科目や関連科目を幅広く学ぶことで、福祉の現場実践を支える基礎的知識を習得。(詳細は「全社協 中央福祉学院」で検索)



ボランティアコーディネーター、コミュニティソーシャルワーカー、生活支援コーディネーターが務めます。横尾さんは、「地域のキーパーソンや民生委員・児童委員を、顔のつながる関係で紹介することもできます。さまざまな事例を共有しつつ、学べる情報交換の場にしたいと考えています。」と語ります。

現在、ネットワークでは子ども食堂を継続していくために、食材の継続的な確保をめざし行政やJAとの話し合いを進め、5月から農産物直売所（JA運営）の廃棄前食材を子ども食堂で活用する試行的取り組みを始めました。また、企業寄付の受け入れ窓口にもなっていますが、地域の子どもの応援する視点で企業に支援を提案し、結びつけていくことも、今後のネットワークの課題です。

小池さんは、「子ども食堂は継続が鍵です。子どもが大きくなったとき、『子ども食堂があってよかった』と言われるような継続性を、ネットワークとしてどのように支援していくか、また、現時点では各団体ともそれぞれの運営で精一杯ですが、少し地域に根づいたとき、地域の子どもの状況をどうキャッチし、コミュニティソーシャルワーカーにつないでいくかが求められてくると思います。情報共有のあり方など、ネットワークに求められる役割は大きいです」と、今後の取り組みの抱負を話しました。

## 子ども食堂運営者からの社協・VCへの期待



「こどもの茶の間」主催

**細野 弘康 さん**

（連合 新潟地域協議会 事務局次長）

新潟市内で子ども食堂を運営している細野さんに、運営の課題、また社協やボランティアセンターへの期待について伺いました。

### 子ども食堂運営の状況は

私にも、6歳と3歳の子どものいます。身近な子どもの課題を解決していくため、子ども食堂は比較的垣根が低く取り組みやすいと思い、夫婦2人で立ち上げました。現在、月に2回開催しています。1回あたり50～60人の親子が参加します。利用者は親子が多く、子どもの8割が未就学児です。

### 活動継続のポイントは

ボランティアとしての活動範囲を超えると、続かなくなってしまいます。また広報も大切です。現在は主に口コミとインターネットですが、地域に案内するチラシに区社協の名称を後援として入れて、信頼性を高めています。

### ネットワーク・社協への期待は

社協には、各団体をつなぐパイプ役を担ってほしいです。特に区社協は地域に根づき、さまざまな情報、経験やノウハウを持っています。子ども食堂の実践は、これまでの社協のノウハウを集約し、支えあう地域づくりを発展させる可能性を持っていると思います。地域福祉を進めるため、一緒にチャレンジしていきたいです。

**新潟市  
子ども食堂  
ハンドブック**

（「新潟市子ども食堂ハンドブック」は、新潟市社会福祉協議会のホームページからダウンロードできます）

「クリエイティブな“ふくし”の魅力」をWeb公開

福祉の仕事の専門性と魅力・やりがいの発信を通じ、福祉に対するポジティブなイメージを形成することを目的として、映像レポートをWeb公開中。社会福祉施設、社会福祉協議会など4か所で働く職員にスポットをあて、福祉の仕事の意義や魅力を紹介（映像はYoutube「クリエイティブな“ふくし”の魅力」で検索）

## 事例2 東京都荒川区 あらかわ子ども応援ネットワーク



左から、浅野さん、大村さん、鈴木さん

東京都荒川区は、隅田川沿いの約10キロ平方メートルの面積に20万人が暮らす、東京の特別区でも比較的小さな区です。

荒川区社協・荒川ボランティアセンターでは、「あらかわ子ども応援ネットワーク」(以下「ネットワーク」)の事務局として、区内10か所の子どもの居場所、子ども食堂の連絡調整を行っています。

荒川区社協地域ネットワーク課  
荒川ボランティアセンター長

あさの よしあき  
浅野 芳明 さん

あらかわ子ども応援ネットワーク  
代表

おおむら こ  
大村 みさ子 さん

荒川区社協地域ネットワーク課  
ボランティアコーディネーター

すずき ことこ  
鈴木 訪子 さん

### 居場所づくりから始まった荒川区 内の子ども食堂

荒川区最初の子どもの食堂は、2014年、子どもの居場所づくりの一環として、「子ども村:中高生ホッとステーション」が実施したのが始まりです。代表の大村みさ子さんは高校教員をした後、地域の子どもの支援の活動に関わりながら、小学校での教育支援員、区主催の学習支援の会スタッフとして見守ってきました。しかし、学校以外で子どもの生活に関わることができない限界を感じました。そこで、ニーズを持った子どもたちを支援する中高生ホッとステーションを立ち上げ、居場所づくりとあわせて学習支援と食事の提供を行いました。現在は1回あたり40食程度を用意しています。

大村さんは「どのように進めたら良いかの手立てが分からず、社協ボランティアセンターに相談に行きました。すると、

『区内に中高生を支援する活動はないので、ぜひやりましょう』と背中を押してくれました」と、当時を振り返ります。

社協では、歳末たすけあい助成金による助成を3年間続けました。あわせて、行政に子どもの居場所に対する継続的な補助の必要性を働きかけ、2015年から区の補助制度も設けられました。この補助制度が、区内の子どもの居場所、子ども食堂の広がりを後押ししました。

### ネットワークの必要性に気づく

大村さんは、活動にあたり最初は食事を重要視していませんでした。しかし、実際に活動を始めてみると、生活が安定していない中学・高校生のほとんどが、食事がしっかり摂れていないことに気付いたのです。また行政の支援には限界があり、食事など子どもの日々の生活を支えるのは、地域の人々にしかできな

いことも分かりました。そこで大村さんは、地域の関係者がつながるネットワークづくりを社協に提案しました。

2017年7月、「あらかわ子ども応援ネットワーク」がスタートしました。ネットワークには、子ども食堂、子どもの居場所、フードバンク、シングルマザー支援など13団体が参加。また行政からも、子ども家庭支援センターをはじめ、子育て支援課、教育委員会や生涯学習課など6部所が参加しました。事務局は社協ボランティアセンターが担います。

社協ボランティアセンターの浅野さんは、「15年ほど前から、子育て支援に関する社協と行政との情報交換の場がありました。そのため、比較的スムーズに官民協働のネットワークがスタートできたと思います」と語ります。

### つながることで子どもへの支援に 厚みが出る

ネットワークでつながることで、子どもたちを支える取り組みが次々と行われています。

区内では、火曜日から金曜日、隔週で日曜日と1週間のうち土曜日以外の6日間はどこかで子ども食堂が実施されているので、支援が必要な子どもたちは、ネットワークによる情報提供で区内の子ども食堂を順に利用できます。

また、中高生ホッとステーションで食事をしていて中学・高校生が、区内の他の子ども食堂で、お兄さん・お姉さん役として、小学生の食事提供の手伝いを



「あらかわ子ども応援ネットワーク」の会議のようす



する例もあります。いつもはサポートされる側の中学・高校生が、他の子ども食堂で、運営に携わる保護司会、民生委員・児童委員、商店会などの地域のおとなと関わりながら、小学生をサポートする側に回ります。

区の更生保護女性会では、大村さんの講演をきっかけに、2か所の子ども食堂を継続して支援しています。更生保護女性会は多くのメンバーが分担することで、1人あたり年2～3回の活動となり、負担感なく子ども食堂を支援することができます。

鈴木さんは、「隣の子ども食堂は、ライバルではなく仲間です。荒川区内では、複数の子ども食堂で子どもへの気づきを共有し、子ども家庭支援センター、学校とともに、ケース会議で支援の方向性を検討している例もあります。一人の子どもに対して、迷わない支援ができるように情報共有をしています」と話します。

### ボランティアセンターが地域と子ども食堂をつなぐ

子ども食堂からのニーズを、ネットワークで解決する例もあります。区内で複数の子ども食堂を利用する子どもた

ちの移動手段として、子ども食堂に自転車を置きたいとの相談を受けました。事務局の荒川ボランティアセンターでは、区の自転車店をつくる協同組合に相談し、翌日にはリサイクル自転車が複数台提供されました。

大村さんは、「例えば、自転車がほしいと行政に相談に行っても、行政は補助の仕組みを制度で作るので、実現までに長い時間がかかります。しかし社協は、自転車商組合に声をかけました。この解決策は、私たちに想像できません。社協と長い間の信頼関係があるからできるのですが、地域の力はアマゾン（通信販売）より早いと感心しました」と語ります。

鈴木さんは、「私たち事務局はさまざまな支援を受け入れる窓口となり、地域住民に子どもの居場所、子ども食堂の活動を見えるようにして、地域により多くの応援団を増やし、活動につなげることを担っています」と話します。

### 子どもが人々の力で育ったことを実感できる地域に

現在ネットワークでは、首都大学東京、東京家政大学と協働し、定期的な

ボランティア説明会の開催とボランティアのマッチングをめざしています。あわせて、一つひとつの子ども食堂では限界がある企業寄付受け入れ窓口としての役割を強化しています。また、事務局に届けられた食材を、区内の子ども食堂に運ぶボランティアグループの組織化など、多くの市民が無理なく参加できる範囲での仕組みづくりをめざしています。

今後のネットワークについて鈴木さんは、「食事や学習支援から、もう一歩子どもの生活や家庭状況に寄り添った支援の必要性が出てくると思います。その時にどのような支援の方法があるのか、事例検討を行いながら考えていきたい」と話します。

また大村さんは、「うずくまったり、つまづいている子どもへの応援団をめざしたいと思います。一方的な支援ではなく、多様な世代の人々が集まることでお互いに満たされる。いわば地域全体が家族となる関係を作りたいと考えています。地域の企業への就労支援なども今後の課題です。」と語ります。

ネットワークでは、子ども食堂を、子どもを支えるネット（網）の最初の入口として、地域の協働でその網目をできるだけ小さくすることをめざしています。



「あらかわ子ども応援ネットワーク」の概念図

# 企業のキカラ

さらなるボランティア・市民活動発展へのカギ

CSRやCSVの推進が課題となるなか、企業によるボランティア活動に注目が集まっています。企業とボランティア・市民活動にはどのような接点があり、その意義はどこにあるのでしょうか。本コーナーでは、具体的な取り組みを紹介しつつ、企業によるボランティア活動の可能性と新たに生み出される社会的な価値について探っていきます。

## 第10回 地域に根ざした企業として、地域のネットワークを活かしたボランティア活動を展開



### 会社概要

#### カナツ技建工業株式会社

1938(昭和13)年6月「金津組」として創業、1954(昭和29)年に法人設立。現在は資本金1億円、社員数250名、年間施工高80億円の企業に成長。島根県を中心に中国3県で、土木、建築、環境、住宅事業の4部門にわたる事業を展開。とくに土木部門は道路、港湾、橋梁等の公共工事、また環境部門では上下水等の水環境などに関わり、地域に根ざした公共性の高い事業とサービスを提供している。昨年、地域経済牽引事業の担い手候補となる地域の中核企業として、経済産業省が選定する「地域未来牽引企業」に選ばれた。

### 社会貢献の取り組みと考え方

当社の経営信条の最初の項目は、「社会を通じて社会に貢献する」です。当社の故・金津 敬 会長は、「地域の繁栄なくして企業の繁栄はない」と繰り返し述べていました。

当社の主要事業は公共事業であり、税金が原資です。また、工事では騒音や振動が発生するなど、地域のみなさんに迷惑がかかる面があります。地域に支えられ、地域の協力のもとに行われる本業に対し、地域に必要とされる企業として成長していくため、社会貢献・ボランティア活動に取り組んでいます。

環境美化活動は、約20年にわたり取り組んでいます。海岸や公園、河川の清掃・美化活動を行います。地域のみなさんや社員の家族が参加する活動もあります。地域の皆さんからの「今年もご苦勞様」との挨拶、また制服のマークを見て「カナツ技建の方ですね」と声をかけてもらうことが励みになっています。

建設工事中の現場に、地域の方々や子どもたちを招待する取り組みも行っています。高所作業車や建設重機の体験などは、子どもたちから大変喜ばれます。また、地域行事に社員が積極的に参加して

います。継続的な募金活動、交通遺児への激励金、地域の安心・安全を支えるための交通安全教育への協力を行っています。

### 社員の参加を促す仕組みづくり

9年前から、ボランティア・地域貢献活動のために休暇が必要な場合に取得できる「特別休暇制度」を設けました。これは原則2年間で消滅する年次有給休暇未取得分を、社員の状況に応じて積み立て、ボランティア活動をはじめ、介護・育児、地域の自治会、消防団、行事運営等で休暇が必要な際に利用できるようにしたものです。制度を持つことは、社員の参加を促すポイントと考えています。

### 企業ネットワークによる情報交換

当社の規模では社会貢献の専門部門は持ちづらいのですが、松江市には、社会貢献やボランティア活動の情報を得る場として、阪神・淡路大震災を契機に1997年に設立された「企業ボランティア松江ネットワーク会議」があります。現在、松江市内の一般会員70社、個人会員70名で構成され、松江市社協・松江市ボランティアセンターが事務局を担い、地域行事への協力やシンポジウム、イベントへの協力を行っています。

ネットワーク会議に参加する企業のみなさんが、地域のイベントに熱心に取り組んでいる姿を見て、自分自身の社会貢献、ボランティア活動に対する考え方も変わり、惹かれていきました。

故金津敬会長、金津任紀現社長は、当

社独自の活動はもとより、他社と連携し、他社の取り組みも参考にしながら社会貢献を進めることを常に意識しており、私たちも他社から学ぶ視点が多いです。社会貢献・ボランティアのための休暇制度も、他社の導入事例を参考としました。

現在、企業に対する社会の見方も変化しています。地域の見方が変化すれば、社会貢献の内容も変化します。地域のニーズを大事にして、福祉・環境・教育など幅広く社会のためになることを支援していきたいと思います。

### 企業の社会貢献が一層必要になる情勢

企業の社会貢献やボランティア活動は、今後一層重要になると考えています。自治体の財源が厳しくなれば、それまで行政で実施してきたサービスも民間に頼らざるを得なくなります。その時に、企業がどこまで関わるができるのかが、地域住民の生活の豊かさを持続させていくポイントだと思います。

ニーズは地域にあります。企業活動は地域のみなさんにお世話になっていますから、地域のニーズを掴み、地域のみなさんと手を携えて、それぞれの地域に必要なサービスを提供していくことが求められます。例えば、災害ボランティア活動です。災害時のインフラなどの緊急復旧、そして長期の復興を支えているのは私たち建設業です。災害時に私たちができることは何なのか、公民館や自治会組織など、地域のみなさんにもお尋ねしながら、できる限りの取り組みを進めていきたいと考えています。



社員・家族の参画によるクリーン運動のようす



障害がある方の絵画を建設現場に展示



### 書籍紹介

社協パンフレット2018年版頒布(全社協 地域福祉部)

社協の事業・活動を広く知っていただくためのツールとして、社協パンフレット2018年版「誰もが暮らしやすい地域づくりをめざして“つながり”と“お互い様”をひろげる社会福祉協議会」を頒布開始、1部150円(税込・送料別途)

(詳細は、「地域福祉・ボランティア情報ネットワーク」で検索)



# 出会いから始まる 福祉共育

## ～No.1「嫌いからはじまること」①～

地域における孤立などの課題が深刻化するなか、福祉教育の取り組みが重要になっています。社会福祉施設や学校などの関係者と協働しながら、地域でどのように人々の気づきを促し、福祉教育を進めていくことができるのでしょうか。福祉教育を進めるボランティアセンター職員へのメッセージを、新崎国広さんの実践やエピソードから、1年間の連載を通じてお伝えします。

### 障害のある友達とのつきあいのなかで

今から40年前、学生時代の私は「ボランティア」という言葉が嫌いだった。大学1年生のはじめての授業は社会福祉概論。そのとき、斜め前に身体障害がある青年が座っていた。「福祉の大学を選んだのだから授業が終わったら『おはよう』って笑顔で声をかけよう」という思いと「そんなことしたら偽善者と思われるのでは」という葛藤で授業の内容は全く覚えていない。授業終了後、思い切って声をかけてみた。

彼は、脳性まひによる言語障害があった。友達が全くいなくて不安だったことを身体全体を使って話してくれた。私も必死で聴いた。偶然にも基礎ゼミも一緒とわかった。それから、我々は生涯の友になった。車椅子では通学の電車でも嫌がられること。養護学校(現在の特別支援学校)の仲間が、卒業後家に閉じこもりがちになっていること。社会には様々なバリアが存在すること等、いろいろなことを彼から学んだ。

ゼミの仲間達と相談して、時々彼や彼の友達と一緒に街に遊びに行った。ラッシュ時に乗車拒否されて駅長室に談判にも行った。そんなとき他人から「ボランティア、偉いですね」なんていわれたら無性に腹が立った。ただ友達と一緒に外出してるだけなのに…。ボランティアという言葉は、友達同士の関係を切る言葉に聞こえた。

### ボランティアの存在が施設に風を運んだ

4年後、私は肢体不自由児施設で働くようになった。当時の社会福祉施設のもつ閉鎖性に愕然とした。障害をもつ子ども達が地域で暖かく受け入れられる社会を創りたいと真剣に考えた。それから私のテーマは、「施設の社会化」と「保護者との言い合える関係づくり」となった。

「施設の社会化」の大きな力になってくれたのは、知識も技術ももたないボランティアの存在だった。彼等が運んでくれる暖かい社会の風は、施設の閉鎖性

を少しずつ開放していく原動力となった。「ボランティア」、私はかつて嫌いだったものを今はとても大切だと思っている。あれだけ嫌っていたからこそ、その本質が自分なりに理解できたのかも知れない。「愛情の反対は嫌悪ではなく無関心」であるように。

大阪教育大学教育学部  
教育協働学科  
教育心理学講座  
教授

あらさき くに ひろ  
新崎 国広



#### <新崎さんからのメッセージ>

私は、今号から「出会いから始まる福祉共育」を担当する63歳のおっさんです。これから、さまざまな出会いを通してお互いが学び合い育ち合う福祉共育の素敵なエピソードをお届けします。

#### プロフィール

1978年より、肢体不自由児施設にてソーシャルワーカー兼ボランティアコーディネーターとして従事。働きながら、社会福祉士資格取得&大阪教育大学大学院修士課程修了。

## 地域に活気・活動に元気、ファンドレイジングのすすめ

ボランティア・NPO団体が、市民や企業に対して活動への理解と共感を広げながら財源を集めるファンドレイジング。地域に活気をもたらし、活動を元気にする「くふう」をご紹介します。

### 石川県白山市 「赤い羽根 白山ろくあったか募金」

白山市社会福祉協議会 地域福祉課 まえだ かな 前田 佳那さん

石川県白山市では、2015年から共同募金のテーマ型(使途選択)募金を活用し、「赤い羽根 白山ろくあったか募金」に取り組んでいます。市内のさまざまな福祉課題の解決をめざし、前回は市民活動団体など3団体が参加、白山市市民活動・ボランティアセンターもその一員として、「雪かきボランティア事業」でエントリーしました。

参加団体は、自らの活動主旨を市民にアピールして寄付を募ります。あわせて、ショッピングセンターでの街頭募金、地域交流行事の物品販売など、団体どうしが協働して寄付を呼びかけます。募金活動を通じ各団体の理解が深まり、

新たなネットワークが生まれる成果も出ています。

一方、寄付をする側の市民にとっても、「寄付先を選ぶことで積極的になれる」「使いみちが分かりやすく寄付しやすい」などの声が出され、目標額を超える募金が集まっています。



詳細は、白山市社会福祉協議会ホームページ、またはFacebook「赤い羽根 白山ろくあったか募金」で検索してください。



白山市社会福祉協議会が実施する「雪かきボランティア事業」のようす



### 書籍紹介

「はじめよう! ボランティア」

全4巻、小学生・中学生にできるさまざまなボランティア活動を具体的に紹介するとともに、計画からふりかえりまでのワークシートを添付。総合的な学習の時間や、学校独自の取り組みで活用できる(詳細は「廣済堂あかつき」で検索)

## 保険のひろば

H O K E N N O H I R O B A

ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

## 全社協の「ボランティア活動保険」



全国社会福祉協議会の「ボランティア活動保険」について、日頃みなさまからよくお問い合わせいただく質問についてお答えします。ボランティア活動の安心・安全のために、さまざまな事故によるケガや賠償責任を補償する「ボランティア活動保険」をこれからもどうぞお役立てください。

## ボランティア活動保険のQ&amp;A

**Q1** 中途加入した場合の補償期間はいつからいつまでですか？

**A1** 中途加入手続きが完了された翌日の午前0時から補償開始となり、3月31日午後12時で終了します。

**Q2** 複数のボランティアグループに所属している場合、各々のグループ毎に保険に加入する必要がありますか？

**A2** いいえ、どちらか一つのグループで1口加入してください。ご加入は1人1口のみで、他のグループでのボランティア活動や他県での活動も補償の対象となります。

**Q3** 中途での加入プランの変更やボランティアの入替はできますか？

**A3** 加入されたプランの変更や中途でのボランティアの入替はできません。

**Q4** ボランティア活動の際に交通費と昼食代が支給されますが、無償の活動と考えてよいですか？

**A4** はい、交通費、昼食代、活動のための材料費等であれば実費弁償として無償扱いです。但し、謝礼、日当、報酬が支給される場合は、金額の多寡にかかわらず有償扱いとなりボランティア活動保険では対象外となります。有償の場合は、福祉サービス総合補償をご検討ください。

**Q5** マイカーを運転してボランティア活動に向かう途中、自動車事故を起こしてしまいました。ボランティア活動保険で補償されますか？

**A5** ボランティア自身のケガは対象となりますが、事故に伴う対人・対物賠償や自車両の損害等は対象となりません。加入されている自動車保険でのお支払いとなります。

**Q6** ボランティア活動に出かける際に自宅の庭で転んでケガをしましたが、補償の対象になりますか？

**A6** 自宅の庭(敷地内)でケガをされた場合は、補償の対象となりません。往復途上の補償は自宅の敷地を出たところから、自宅の敷地に戻るまでとなります。

**Q7** 基本タイプと天災タイプの補償の違いを教えてください？

**A7** 両タイプともにケガと賠償責任を補償しますが、基本タイプでは天災(地震・噴火・津波)によるケガは補償されません。一方、天災タイプは基本タイプの補償範囲に加えて、天災(地震・噴火・津波)によるケガも補償されます。なお、台風・洪水・竜巻・落雷等によるケガは、いずれのタイプでも補償されます。

■この内容は概要を説明したものです。詳しい内容につきましては、取扱代理店または損保ジャパン日本興亜までお問い合わせください。

＜取扱代理店＞株式会社福祉保険サービス 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル TEL:03-3581-4667 FAX:03-3581-4763  
＜引受保険会社＞損害保険ジャパン日本興亜株式会社 東京都千代田区西新橋1-26-1 TEL:03-3349-5137 FAX:03-6388-0154

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp>

## 「ボランティア全国フォーラム軽井沢2018」のご案内

全体テーマ 「響け！ ボランティア文化 協奏曲」

開催日：2018年11月3日(土・祝日)、4日(日)

地域はもちろん、学校でも、会社でも、あらゆる場面でボランティアやボランティアな精神が息づく、そんな地域社会をめざしていこう。「ボランティア全国フォーラム軽井沢2018」では、この思いを参加者のみなさんと共有し、ともに考え、全国に発信していきます。

**第1日 全体会シンポジウム「支えあいの文化を全国に広げるボランティア活動」登壇者が決まりました！**

生活拠点(ミクロ)から全国域(マクロ)までのさまざまな活動を通じて、今後のボランティア・市民活動推進の新たなヒントを共有します。各地で活躍し、ボランティア・市民活動を切り拓いてきた方々からのお話は必見です。

参加申込み受付は、7月1日から予定しています。詳しくは「ボランティア全国フォーラム軽井沢2018」Facebookをご覧ください。

ボランティア全国フォーラム軽井沢2018  
Facebook URL  
<https://www.facebook.com/karuizawa2018/>



## ＜第1日 シンポジウム登壇者のみなさん＞

- 上野谷加代子さん(「広がれボランティアの輪」連絡会議会長 同志社大学教授)
- 山崎美貴子さん(「広がれボランティアの輪」連絡会議顧問 東京ボランティア・市民活動センター所長)
- 鈴木健夫さん(軽井沢町 株式会社音羽の森 代表取締役)
- 宮下俊哉さん(真田長谷寺住職・主任児童委員・NPOほこほコネクト理事長 真田の郷まちづくり推進会議会長)
- 鹿野順一さん(NPO法人@リアスNPOサポートセンター 代表理事)

「広がれボランティアの輪」連絡会議も、「ボランティア全国フォーラム軽井沢2018」主催団体の一員です。



今年度より、ボランティア情報の取材・編集に携わるようになりました。岸本と申します。新卒の採用で、大学院時代は、主に民生委員・児童委員の活動について研究をしていました。引き続き福祉の世界で頑張れることに大きな喜びを感じています。どうぞよろしくお願いいたします。

今回は、さっそく「あらかわ子ども応援ネットワーク」の取材に同行いたしました。普段の生活のなかで感じた思いをもとに、地域の資源やつながりを惜しみなく生かした実践に心を打たれました。取材で学んだ魅力あるヒントを、ぜひボランティア情報から発信していきたいと思った経験でした。

(岸本)

事務局だより